太宰治の随筆「自著を語る」におけるパラテクスト――自作・自著言及における機能

小田桐　ジェイク
筑波学院大学　助教

発表要旨

日本近代文学の代表作家の一人である太宰治（一九〇九～一九四八）は『斜陽』（一九四七）や『人間失格』（一九四八）などの作品でよく知られているが、随筆も初期から没する時期まで書いていたことは広く知られていないだろう。従来の研究においては多少、注目されたこともあるが、その多くは作家の意図や作家の精神、「作品」のようなものとして読まれる場合がしばしば見受けられる。したがって、これまで、太宰の随筆におけるパラテクストの機能が考察されたことがさほど多くはないということで、本発表で新たに太宰の随筆を読み直す試みを行ってゆきたい。

本発表では改めて太宰の随筆を考え直すために、パラテクストの枠に入れた上で随筆の機能を考察する。まずは、太宰の随筆の全体像を捉え直し、従前の扱い方を整理しておく。特に考えたいのは、これまで随筆がどのようにジャンル化されてきたのかということである。そして、一九四五年一月に発表された随筆「自著を語る」（『月刊東奥』）をケーススタディーとして取り上げ、自作及び自著への言及は私たち読者にどのような影響を与えるのかを論考してみる。本発表では、「自著を語る」における表現を読み直し、随筆という媒体における自己宣伝の機能を解釈していく。